

αM プロジェクト 2022 企画 プレスリリース

時下、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

この度、gallery αMでは、αMプロジェクト2022として展覧会「判断の尺度」を開催いたします。

つきましては、以下に展覧会の概要をお知らせいたしますので、ご高覧いただけましたら幸いです。

αMプロジェクト2022

## 判断の尺度

Have something that defines my judgment

ゲストキュレーター：千葉真智子（豊田市美術館学芸員）

2022年4月16日（土）～2023年3月11日（土）

参加作家：高柳恵里、加藤巧、荒木優光、大木裕之、高嶋晋一＋中川周

vol. 1 高柳恵里

2022年4月16日（土）～6月10日（金）

vol. 2 加藤巧

2022年6月18日（土）～8月6日（土）

vol. 3 荒木優光

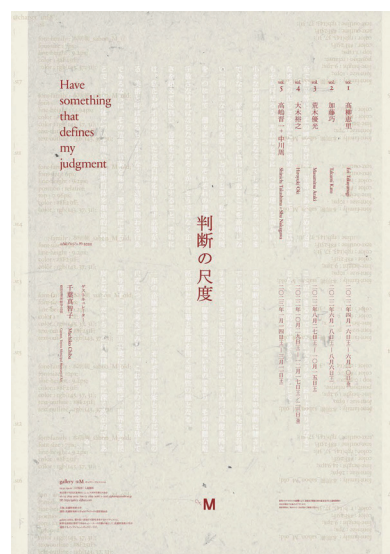
2022年8月27日（土）～10月15日（土）

vol. 4 大木裕之

2022年10月29日（土）～12月17日（土）／23日（金）

vol. 5 高嶋晋一＋中川周

2023年1月14日（土）～3月11日（土）



デザイン：大西正一

主催：武蔵野美術大学 運営：武蔵野美術大学αMプロジェクト運営委員会

会場：gallery αM ギャラリーアルファム

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11 アガタ竹澤ビルB1F

tel:03-5829-9109 fax:03-5829-9166

日・月・祝休 入場無料 12:30～19:00 (2022年度より開館時間を変更いたします。)

<https://gallery-alpha.com>

※新型コロナウイルスの影響により、会期及び開廊日時の変更並びに入場制限等の対応を検討する場合がございます。最新情報は、Webサイト、SNS等をご確認ください。

■展覧会に関するお問い合わせ、取材依頼等は下記までお願いいたします■

gallery αM ギャラリーアルファム

[alpham@musabi.ac.jp](mailto:alpham@musabi.ac.jp)

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11 アガタ竹澤ビルB1F

tel:03-5829-9109 fax:03-5829-9166

## 判断の尺度

全ては平等に。その呼びかけは、平等であるために過度なまでの正しさを私たちに求める。しかし正しさとはそもそも何だろう。それはときに一つの原理へと向かい、小さな個別の差異を見えなくしてしまうだろう。いうまでもなく、平等であることは同じであることを意味しない。同じでないものを等しいというとき、私たちは尺度を一つにして、個々についてのそれぞれの評価や判断を手放さなければならないのだろうか。そうではなく正しさを超えて区別し、言葉を与えようとする。それには、私たちが手垢のついた言葉自体を作り直す必要がある。美術と呼ばれるものが少なくとも造形に関わる行為であるならば、その造形＝言葉を練り、抛り所にする事で、尺度自体について問い、判断自体を創造的に作ることができるのではないだろうか。独りよがりになることなく、普遍的な外部をもつものとして。

私の判断が普遍性をもつかどうかは他者の判断に賭されている。私の判断を支えるものとして、私の外部を召喚すること。そこで想定されるのは、予め同じ尺度を持たないもの、置き換えできないものであり、その困難な対話が新たな言葉と批評を開く可能性の種となる。

1年の企画をとおして、それぞれの作家とともに判断の尺度について考えてみたい。これまでの尺度を手放して作り直す。この造形＝言葉による判断は、世界を測る尺度となる。だからこの行為は、静かに深く政治的でもある。

千葉真智子（豊田市美術館学芸員）

## ゲストキュレーター プロフィール

### ●千葉真智子（ちば・まちこ）

豊田市美術館学芸員。愛知県生まれ。企画担当した主な展覧会に「寺内曜子 パンゲア」豊田市美術館（愛知、2021）、「岡崎乾二郎 視覚のカイソウ」豊田市美術館（愛知、2019）、「切断してみる。 —二人の耕平」豊田市美術館（愛知、2017）、「遠隔同化 二人の耕平」「切断」のち「同化」KYOTO ART HOSTEL kumagusuku（京都、2016–2017）、「ほんとのうへのツクリゴト」岡崎市旧本多忠次邸（愛知、2015）、「ユーモアと飛躍 そこにふれる」岡崎市美術博物館（愛知、2013）など。また、デザイン・装飾芸術に関する展覧会も企画。今年度、「交歓するモダン 機能と装飾のポリフォニー」（豊田市美術館）を担当開催予定。

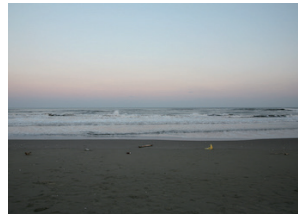
## 作家 プロフィール (会期順)

### ●高柳恵里 (たかやなぎ・えり)

1962年神奈川県生まれ。多摩美術大学大学院美術研究科修了。主な個展に「デモンストレーション」TALION GALLERY(東京、2021)、「それは、正確であるか」See Saw gallery + hibit (愛知、2019)、「性能、他」サイギャラリー (大阪、2019)、switch point (東京、2016)、「油断」上野の森美術館ギャラリー (東京、2014)、「不意打ち」TIME & STYLE MIDTOWN (東京、2013)、「近作展 28 高柳恵里」国立国際美術館 (大阪、2003) など。主なグループ展に「MOT コレクション つくる、つかう、つかまえる—いくつかの彫刻から」東京都現代美術館 (2013)、「20 世紀美術探検—アーティストたちの三つの冒険物語—」国立新美術館 (東京、2007)、「心の在り処」(ブダペスト、モスクワ、2003)、「美術館を読み解く—表慶館と現代の美術」東京国立博物館 (2001)、「MOT アニュアル 1999 ひそやかなラディカリズム」東京都現代美術館 (1999)、「VOCA 展 1999」上野の森美術館 (東京、1999)、「やわらかく重く—現代日本美術の場と空間」埼玉県立近代美術館 (1995)、ライフギャラリー (アメリカ、1996) 巡回、「彫刻の遠心力—この十年の展開」国立国際美術館 (大阪、1992) など。



《実存》  
2018年 | 毛布、アルミ複合板、板 | 11×73×53cm  
撮影:木奥恵三 提供:TALION GALLERY



《2m(ルールとアバウト/K)》  
2014年 | 発色現像方式印画 | 41.4×59cm



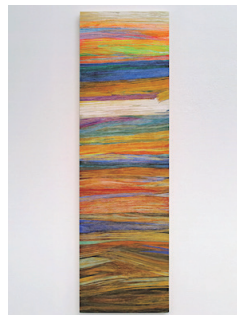
《レンガとブロック》  
2019年 | レンガ、ブロック | 20×78×40cm

### ●加藤巧 (かとう・たくみ)

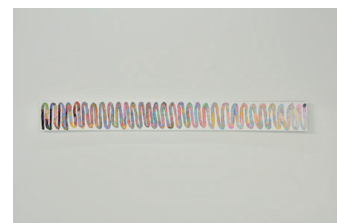
1984 年愛知県生まれ。岐阜県在住。美術家。人間が扱う材料や行為を中心的な関心として、それらを検討、再構築することで絵画などの作品制作を行なっている。近年の主な個展として「Quarry」gallery N (愛知、2021)、「Re-touch」the three konohana (大阪、2021)、「ARRAY」the three konohaha (大阪、2016) など。主なグループ展に「SUPERNATURE」White Conduit Projects (ロンドン、2021)、「2つの時代の平面・絵画表現—泉茂と 6 名の現代作家展」Yoshimi Arts・the three konohana(大阪、2021)、「VOCA 展 2020 現代美術の展望・新しい平面の作家たち」上野の森美術館(東京、2020)、「タイムライン—時間に触れるためのいくつかの方法」京都大学総合博物館 (2019)、「ニューミュレーション ～変・進・深化」京都芸術センター (2018) など。



《Spinach》  
2021年 | 顔料、アクリル樹脂(Paraloid B-72)、水性樹脂(Jesmonite AC100)、木材 | 37.6×29.5cm  
撮影:高嶋清俊 提供:Yoshimi Arts



《Soil Layer》  
2021年 | 顔料、カゼイン、アクリル樹脂(Paraloid B-72)、水性樹脂(Jesmonite AC100)、木材、アルミ材 | 120×35cm



《Stroke #02》  
2018年 | 顔料、卵黄、乾性油、グリセリン、アクリル樹脂、二水石膏、亜麻布、木材 | 20×183cm 撮影:大島拓也

●荒木優光（あらき・まさみつ）

1981 年山形県生まれ。視聴覚空間の多様性を踏まえた新たなフェーズとしての「再生」を軸として実践と考察を進め、独自の音場空間を構築する。主な個展に「わたしとゾンビ」京都市京セラ美術館 ザ・トライアングル（2020）など。主なグループ展に「200 年をたがやす」秋田市文化創造館（2021）、「としのこえ、とちのうた」旧豊田東高等学校（愛知、2019）など。主なパフォーマンスに「サウンドトラックフォーミッドナイト屯」KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭（2021）、「パブリックアドレス - 音場」Kunstenfestivaldesarts（ベルギー、2021）など。



《サウンドトラックフォーミッドナイト屯》  
2021年 | コンサートピース  
撮影：井上嘉和 提供：KYOTO EXPERIMENT



《スウィートメモリーズ エピソード 1-60》  
2020年 | 4Kビデオ、サウンド  
撮影：三吉史高



《Call》  
2021年 | 12incレコード  
撮影：草薨浴 提供：NPO法人アーツセンターあきた

●大木裕之（おおき・ひろゆき）

1964年東京生まれ。東京大学工学部建築学科在学中の80年代後半より映像制作を始め、89年～北海道松前町を中心にした映像作品群「松前君シリーズ」を開始、96年に『HEAVEN-6-BOX』（1995）が第46回ベルリン国際映画祭NETPAC賞を受賞。その表現活動は映像制作のみに留まらず、ドローイング、インスタレーション、パフォーマンスにまで及ぶ。カメラを手に世界各地を旅し、膨大なイメージを次々に重ねていく独特で詩的な映像表現は国内外から高い評価を受け、国際展にも数多く参加している。主な展覧会に「M+ Moving Image Collection」M+（香港、2021）、「あいちトリエンナーレ：虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅」（2016）、「歴史する！ Doing History!」福岡市美術館（2016）、「ライフ=ワーク」広島市現代美術館（2015）、「Out of the Ordinary」ロサンゼルス現代美術館（アメリカ、2007）、「シャルジャ・ビエンナーレ」（アラブ首長国連邦、2007）、「夏への扉—マイクロポップの時代」水戸芸術館（茨城、2007）、「六本木クロッシング」森美術館（東京、2004）、「How Latitudes Become Forms」ウォーカーアートセンター（アメリカ、2003）など。



《LTBTIQ》  
2017年 | HDビデオ、6分41秒



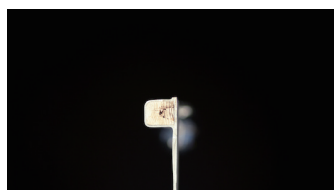
《色目》  
1992年 | 16mmフィルム（カラー、サイレント）、7分



《心の中》  
1998年 | 16mmフィルム、89分

●高嶋晋一＋中川周（たかしま・しんいち＋なかがわ・しゅう）

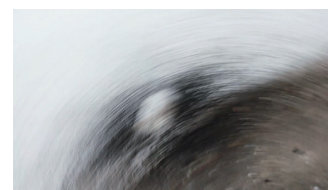
カメラの運動性を基軸とした映像作品を 2015 年より発表。個展に「視点と支点——最短距離のロードムービー Perspective and Pivot Point: The Shortcut Road Movie」MEDIA SHOP | gallery（京都、2019）。主なグループ展に「それぞれの山水」駒込倉庫（東京、2020）、「IMG/3 組のアーティストによる映像作品展」Sprout Curation（東京、2019）、「第 10 回恵比寿映像祭」東京都写真美術館（2018）、「引込線 2017」旧所沢市立第 2 学校給食センター（埼玉、2017）など。主なビデオ・スクリーニングに「Experimental film culture vol.3 in Japan」space&cafe ポレポレ座（東京、2021）など。



《Dig a Hole in a Hole (Homogenize)》  
2018年 | 4K/UHDビデオ（カラー、サイレント／一部音声あり）、21分30秒



《Landed》  
2019年 | 4K/UHDビデオ（カラー、サウンド）、28分36秒



《standstill》  
2017年 | HDビデオ（カラー、サウンド）、40分28秒